

研究レポート

『山海経』の意味するもの

——郭郭『山海経注証』の自序に見る、本質とその意義——

武 部 健 一

解 題

どをぞ、描きたる」とあるのが、『山海経』を元にしたのではないかと推測されるのも、この書が極めて早い段階で伝来したことの傍証となっている。

『山海経』とは、中国古代文献の一つであり、中国古代の地理・博物と神話・伝説の書である。後に掲げる訳文にも示されるように、漢代に校注されており、堯・舜時代にすでに作られたとされる。絵図が付されているのが特徴の一つであるが、原初と見られるものは残されていない。日本でもその存在は早くから知られていて、平安期に藤原佐世の『日本国見在書目録』(九世紀末頃成立)に採られており、清少納言の『枕草子』(一〇世紀末から一一世紀初頭の成立)にも、その二〇段に「清涼殿の丑寅の隅の、北の隔てなる御障子は、荒海の絵、生きたるものどもの恐るしげなる、手長、足長なる出土木簡の一枚に「山海経曰大…」と読めるものがあり

しかし『山海経』の伝来は時代的に更に遡るものと見られ、現在完本として残る唯一の風土記である『出雲風土記』における記載内容や記載形式が『山海経』に影響を受けたのではないかとする考え方もある(小島憲之『上代日本文学与中国文学』上、一九六二年)。それを受け入れるならば、和銅六年(七一三)五月甲子(二日)条が諸国に下された風土記撰進の詔を示すとされているので、奈良時代に『山海経』が知られていたことになる。またやや下がるが同じ奈良朝時代のこととして、平城京発掘木簡がある。二条大路木簡と呼ばれる

(ただし「海」は推定文字、「平城京発掘調査出土木簡概報 22」一九九〇年)、この木簡群に記されている年紀が天平三(七三二)〜十一年であることから、『山海経』がこの時期には到来していたと考えられる資料になる。

さらに下って室町時代(一六世紀)には、その一部である鳥獸図がわが国で作製されており、近世に入つて明刊本(絵入り本)を元に和刻本も出版されている。

この書の性質については、神話・伝説の部分がしばしば強調されるが、中国の博物学者である郭郭氏(かくかく)が『山海経注証』(中国社会学出版社、二〇〇四年五月刊)において、『山海経』にしばしば見られる奇怪な禽獸は明確に中国古代のトテム崇拜習俗に基づくもので、それによつて整理されるとした。本稿は、この千ページを超える大著である『山海経注証』の冒頭における「自序」が、この郭郭氏の考えを集約的に示し、『山海経』の本質を示す重要なキーノートであると考え、これを忠実に翻訳したものである。一、二の挿図も同書から転載した。

なお、日本では小川琢治著『支那歴史地理研究』(弘文堂書房、昭和三年(一九二八)刊)において、小川氏は次のように主張した。すなわち、従来『尚書』の一部である「禹

貢』は地理書として信頼できるが、『山海経』は荒唐無稽の書であるとする見解が一般であつたのに対して、怪物乱神の記載は未開民族には普通であるトテム信仰が中国古代に行われていたことを示すもので、奇異な神話的記載のないものは、儒者の刪定(さんてい)〔字句・文章を削つて改定すること〕を経たもので、かえつてこれのあるものより古書としての価値に疑いが多い、とした。

小川氏はさらに、トテム信仰に由来するものとして、太皞(たう)伏犧(ふくぎ)氏を蛇身人首とし、炎帝神農氏を人身牛首とする伝説を挙げ、また黄帝の父である有熊氏国の君が有蟠(ゆうばん)氏の女を娶つて炎帝を生んだこと、および秦(しん)の先(せん)〔先祖〕である大業(だいぎやく)の母女(じよめ)脩(しゆ)や、殷(いん)の先である契(せつ)の母簡狄(かんてき)がいずれも玄鳥(げんてう)の卵(たまご)を飲んで生んだとされることは、みなトテム崇拜と関係あるもので、同姓が通婚しない風俗は同一トテムの男女間の結婚を忌避(きひ)する異姓結婚(Exogamy)・族外婚(ぞうがいこん)の遺風(いふう)と見なすべきだ、としている。

小川氏の考察は、郭郭氏が分析・提起した論旨と共通の基盤に立つもので、七五年も早くそのことを洞察した小川氏の卓見(たくけん)に驚きを禁じえない。そのことは小川氏が地理学者であることと無縁(むえん)ではなく、郭郭氏が博物学者であることと合せ

見れば、自然科学者としての一致した認識を示しているものと言えるであろう。

以下の訳文において、本文と同じ大きさの括弧書きは原著者により付されたもの、一段小さいものは訳者の付した注である。

自序 (郭郭著『山海経注証』より)

中国の古い歴史を持つ書籍の中で先ず挙げられるのが四種ある。即ち『易経』、『尚書』、『山海経』、『爾雅』がそれである。漢代の劉秀(歆)が『山海経』を校訂した時、『山海経』は唐虞(堯・舜)が建てた王朝の折に出来たもので、奇書であると見なし、「禎祥変異之物(めでたく不思議な物)と考え、遠国異人之語俗(風俗)と見る」として博物の類に帰した。その後、東晋の郭璞が伝(注釈)を作ったとき、その序文で「世の『山海経』を覽る者の、皆以てその闕誕迂誇(荒唐無稽)にして奇怪倣儻(群を抜く)の言の多きこと疑わざること無し……ああ達観博物の客、それ之を鑿(かた)よや」と言及し、漠然と博物の類の書であると説明している。その後の注釈家も、多くは『山海経』を奇書・怪書と解釈してきた。清

代の畢沅・郝懿行は博引傍証し、「箋注」(注釈)が比較的多く、「將(まさ)に以つて俟后(待望)之博物(の書)なり」とした。

近世の学者は『山海経』を地誌の権輿(初め)・神話の淵府(源)とした。またある青年学者はトートテム学の一種の書籍と見なした。一九八六年、筆者は英国ケンブリッジ大学の中国科学史の権威である李約瑟(ジョセフ・ニーダム; Joseph Needham)博士の許可を受けて『中国古代動物学史』(原著 Science and Civilization in China, Vol.6 Biology and Biological Technology, Part 5 Zoology)一

書を翻訳編集した。一九八七年に『山海経』を初めて読んだ時、頗る骨が折れ、分りにくいと感じ、当時の理解では書中の「九頭虎」「双頭猪」等は、その解釈が容易でなかった。その後、東西の学者の社会学、トートテム学の専門書をじっくり読み、時を見てイギリス、フランス、アメリカの博物館と民俗学展覽館で各



『山海経』の虎身人面九首の虎トートテム

国の古代民俗を陳列している処を訪問した。その中の「荒誕(大げさな)動物図像は、実は各国のトーテム崇拜習俗であった。ここから思いがけなく、中国の『山海経』の内容と図形が、中国の大昔のトーテム崇拜を遺留した事物であることがはっきりと分った。筆者が過去に実験動物学研究を担当していた時、二体または四体の昆虫の蛹を串形あるいは並列に移植して一体化し、後にそれが二体あるいは三、四体が連結した蛾になったことがある。これは人工連接縫合動物身体手術の類であり、生物連体縫合手術(Parabiosis)と呼ばれるものである。『山海経』中の「九頭虎」あるいは「双頭猪」等を思い起こすと、すなわちこれは動物のミイラに連合あるいは縫合の手術を施してトーテム神を作ったのだ。ここに至つて突然、『山海経』は中国の古いトーテム学典籍の一つであることがひらめいた。遂に一九九二年に『山海経』が記す三〇〇種近くの動物と一〇種余りの動物トーテムの基本的解釈が明らかになった。筆者が認めたところでは、『山海経』中のそれぞれの山や河流の名称の基本はトーテム族遊牧地区であり、また後の自然地理学的叙述におおむね一致するものであった。ただし、いわゆる「某次山経」(たとえば「南山経」など)はトーテム族が分布し占有する地区であり、実は

人文地理学中の地帯であること、また「名は族に随つて遷る」の変化によつて、注釈学者は少なからず混乱した。本書(郭邦『山海経注証』を指す)はトーテム族の分布地帯によつて『山海経』を解釈したので、中国トーテム族が中国大地の状況と勢力消長の変化を開拓したことが理解でき、さらには中国トーテム族と遊牧農耕の発展を説明できる。

一九九四年になつて、筆者はまた多くの学者の『山海経』注釈の書籍、すなわち衛挺生教授と徐聖謨先生の『山海経今考』(山海経地理図考—山経地理考釈、一九七四年、台北刊)、フランスの瑞米・馬蒂厄(レミー・マシュー: Remi Mathieu)博士の『山海経訳注』(Étude sur la mythologie et Technologie de la Chine ancienne, 1983刊)などを収集し、一九九五年から『山海経注証』の著作を正式に進め、まず郭璞、畢沅、郝懿行の注釈を一箇所に集め、注釈がおよそ同一なもの是要約して一つにまとめ、同じでないものやあるいは誤って採録されていないもの、または簡略化されているものは、一つの注釈項目ごとに筆者の意見を付した。『山海経』の地理部分は諱其驥教授と衛挺生、徐聖謨教授の解釈と近代地図所載の地名によつた。植物と樹木は主に陳嶸教授の『中国樹木分類学』、中国科学院植物研究所の『中国高等植物図鑑』と『中

国植物志』、江蘇新医学院『中葉大辞典』等により、動物と昆虫等は主に鄭作新、錢燕文、高耀亭等の『中国脊椎動物学』、『中国鳥類分布名録』と多数の学者の共著になる『中国動物志』、『經濟動物志』、『動物図譜』、『鳥類図譜』等から管致和と周堯の『農業昆虫学』等にまで及んだ。鉱物と金属名称の考証は中国地質学者の章鴻釗教授の『石雅』と『中国大百科全書』等によった。同時に四川成都袁珂教授の注釈これは特に人文科学的内容の方面が比較的多いものであるが、これを参考とし、いちいち明記した。

中国現代の民族は五十六族あり、ここに幾十万年の發展を経て、今日まで進展変化してきた。大昔の中国人類の歴史の源流は長く、元謀人へ一七〇万年以前に生活していた中国猿人の一種、元謀は雲南省の地名のように、北京人は今から一八〇万〜三〇〇万の歴史を隔てている。古い民族がどうやって今日の民族に進展変化してきたかは実物と文献がやや不足している。今なおその事の経過を明らかにすることは不可能である。中国はアジアの東方に位置し、数百万年から数千万年の出生・養育・繁殖を経て、人口は十二億に達し、世界で人口第一の大国になったが、彼等がどのような起源と發展をしてきたかは迷霧の中にある。ここに指摘するに値するの

は、人類の發展過程において、動物の家畜化と植物の栽培、および金属の開發がキーポイントであったことである。中国古代典籍『山海經』中には、犬を飼いならした氏族の犬戎氏、養豚氏族などのトータム神の并逢、また羊、羶（六尺の大羊）、羴（黒い雌の羊）をトータム神とする羊氏族の姜氏羌族、あるいは馬トータム神の驪族等の分布と活動、凶猛動物の竜（鱷、鼉（長江鱧））、熊、虎、豹のような凶猛動物をトータム神として崇拜する氏族に及ぶまで記載されている。

トータム族の活動、遷移、分布と彼等の祭祀儀礼等はみな、『山海經』中に記録されている。人びとはこの中から現代民族あるいは氏族の起源と關係についておおむね遡って探求することが出来る。筆者は同時に『中国大百科全書・民族』、王鐘翰『中国民族史』、『中国少数民族文化史』等を参考にし、中国民族の起源と發展を理解した。

本書はトータム学の視点によって『山海經』の解釈をしようとし、また博物学の専門書の助けを借りて解釈しようとして、中国トータム崇拜時代における古い歴史を持つトータム氏族の活動、遷移、崇拜信仰、畜養動物、利用樹木植物、有毒または治療薬用動植物に対してもかなり多くの注釈をした。このような努力を通して、トータム氏族のトータム神と後の

中国大地上のそれぞれのトーテム族の間の関係の輪郭が明らかになり、中国動植物資源と鉱物資源の一応の理解が出来た。当然ながら、山川河流の地理の主要な作用を用いて、中国トーテム氏族が分布し、トーテム氏族が命名して居住する地を解釈しようとしても、それが自然地理と同じであるか異なっているかは、一概に論じることが出来ない。

中国学者嚴復がイギリス人甄克斯（ジェンクス：Edward Jenks）の『社会通詮』（The State and the Nation, 1919刊）を翻訳し、その中の「蛮夷社会編」（Primitive Institutions）で説いている。蛮夷（ここではPrimitiveの訳である原始人の意味）のいわれは自ずから区別があり、族姓ではなく、国種でもなく、また部落でもなく、トーテムである。数十、数百の多くを集めたものをトーテムといい、虫・魚・鳥・獸百物の形を建り、襍（ふだ）を掲げ、徽幟（旗じるし）とした。これは中国学术界における最初のトーテムの知識であった。トーテム（Totem）という言葉について、中国及び外国の学者一般は、アメリカ・インディアンにその源を持つと認めた。彼らがよく引用する摩爾根（マルコム：Robert Marcom）の『古代社会』（A Guide to the Archeology of the State）の中で認めた処のトーテムは、北アメリカのインディアン人の方言であり、

イロコイ・インディアンはかつて熊、狼、鹿、ビーバー等をもととの氏族の名称とし、またそのような動物を氏族の祖先とその保護神

として崇拜したのである。中国学者、特に凌純声、黄文山、丁驥、李濟、張光直等の学者は中国各地の氏族と氏族の祖先および動植物崇拜について広範に研究し、多大の成果を得たが、ただトーテムの起源と『山海経』との関係を叙述することは余り多くなかった。しかし学者の徐顕之、何光岳等の論文と著書中には、中国各地民族のトーテム崇拜から『山海経』中のトーテムに及んで詳述しており、筆者は本書中にも引用対比して参考にした。中国トーテムの起源と発展については、『山海経』のほかに二つの重要な文献がある。一つは『左伝』（春秋左氏伝）で、昭公一七年（紀元前五二五年）



熊トーテム

山東鄒國君主——鳥トーテム族の伝人（ある學術を受け継ぎ、それを伝授する人）鄒子の叙述に、「昔、黄帝氏は雲を印（紀）としたので、長官（師）に雲の名をつけた。炎帝氏は火を印としたので、長官に火の名をつけた。共工氏は水を印としたので、長官に水の名をつけた。太皞氏は竜を印としたので、長官に竜の名をつけた。我が始祖少皞は鳥を印としたので、長官に鳥の名をつけた……」（小倉芳彦訳『春秋左氏伝』による）と、このように中国の大昔にトーテム崇拜に竜・鳥・雲・火・水などの自然事物と動物があることが明確に示されている。第二は司馬遷の『史記・五帝本紀』の記述に、「軒轅（黄帝）は、熊・羆・貔・貅（虎の族で貔は雄、貅は雌）・貔（大きな虎）・虎などの猛獸を訓練して戦いを教え、炎帝と阪泉の野（今の河北省の涿鹿地方）で戦う」とある。書の中には、六、七個のトーテム氏族が記録されており、軒轅黄帝は有熊氏国の君の子であり、熊トーテム族である。羆族は椶熊（茶褐色の熊）をそのトーテムとし、貔族は雪豹をトーテムとし、貅族は猓豹（大山猫）をトーテムとし、貔族は豹をトーテムとし、虎族は虎をトーテムとし、彼等は連合して炎帝・拜火族・牛族と戦った。司馬遷は、『山海経』が「怪物」を記述している書であることを認め、彼は「敢えて言わず」

として、黄帝と炎帝との間に六、七個のトーテム族間の戦闘があつたことを記録しているが、これには必ず基づくものがあるはずである。『史記』は中国トーテム崇拜を確実に記録するもの一つであり、漢代以後は、トーテム崇拜は中国の中に祖先崇拜や日月山川、靈物（化け物）崇拜として保留されてきたもので、本来的な意義は次第に失われてしまった。人びとのトーテム制への認識は次第に薄れたが、これは社会の進歩がもたらしたものだ。したがって、漢晋以降、人びとはみな『山海経』の内容を「怪物」視するようになったのは当然のことである。

ここ三〇〇年来の西洋の学者は博物学史、すなわちいわゆる自然史 (Natural History) を提唱し、またここ一〇〇年来には科学史——自然科学史と社会科学史が出現した。なおまた多方面の考証を経て、中国の古典籍である『山海経』は、中国の博物学史であり、その中には中国の金属、玉石鉱物、山川河流、海洋、森林、動物、植物、医薬、疾病の分布を詳細に記述してある。有名な山西七七座、現に実証可能なものは約一五〇座、水（川）はまたその全部が実証可能である。山と水は合い連なつて遊牧地区を形成し、すなわちこれは遊牧民族生活区であり、狩獵牧畜時代の遺跡を反映している。

実証可能な動物は三〇〇種、鳥・獸・魚・虫の四大類に帰属し、これらは中国の古代には普通に見られる大型動物である。家畜は犬・羊・馬・牛・豚・鶏などで、これらは既に中華民族の初期に家畜化した動物であり、またそれぞれのトーテム族がトーテム神として尊んだもので、人々の衣食の源、文明文化の源となった。識別できる植物は一六〇種、その内五〇種の植物は食物と薬物になることが出来、家作化(栽培化)したものに稷(きび)・黍(きび)・稻(いね)・粟(あわ)・菽(大豆)等がある。これらは中国で真つ先に栽培化したものであり、これらはまた、ある族がその名を得た源でもあった。『山海経』中に出てくる鉄の山は三一、銅の山二七、金の山一三九、銀の山十二、錫の山四、金玉の山二九、玉の山四六、朱砂丹粟の山十、竜骨の山四、菌茹(キノコ類)の山六、その他などである。山、水、動植物、金属鉱物の分布とそれぞれのトーテムの作用がこのように明らかになり、そのためこの書を博物学——自然史の専門書とすることに異議を唱えるものはない。経中に羅列されている各トーテム族の発明創造は車、軒(貴人の車)、轅、犁、舟、刀、劍、弓、箭、干(盾)、戈、皮、革、毛皮衣服、馬靴、高蹠(たかあし)、鼓、(胡)琴、琴、瑟(おおこと)、埴(つちぶえ)、鐘、牛耕、周田、台田、砥、

砥(砥石)、溝、渠、養蚕、繰糸、織綢(絹織り)、制衣冠、護桑、養蜂、取蜜、陳水導水、堰水堵水、筑台、舞蹈、作歌、作樂曲、作場、琢玉、火種保管、酒蘖(こうじ)等々、科学技術の創造発明であつて、『山海経』がまた中国科学技術源流史でもあることを十分に立証している。中国大地上では狩獵時代から次第に牧畜時代に向けて進んだ。犬の家畜化は犬封族―犬戎族の勲功となり、犬は犬封族―犬戎族のトーテムとなった。羊の家畜化は姜―羌―羊―戎族に貢献した。馬の家畜化は馬族―騊(浅黒色の馬)族の功勞である。牛の家畜化では伏犧族―炎帝族が有名な継承者である。豚の家畜化で、彘(いのこ)族は出色の熟練者となった。鶏の家畜化は太昊族―少昊族、鳥トーテム族の生物報時器となり、鳥族は鶏が時間を正しくかつ気象や天候の進行や日月の出入の観測や予報をすることによって、中国の天文学、氣象学、曆学の發展を促進した。植物、果実は食物の供給と採集をもたらし、中国植物資源の考察を促進した。稷(きび)の栽培化は稷族(羊族の一種)がそれによって名を得て、中国農業の源流となった。稻の栽培化についてはならず、南山経地区は彼等の開拓地である。粟(小米)の栽培化は、炎帝牛族と神農―伏犧(犬―

羊(牛)族の創造と選択育種に功があり、彼等はまた牛耕の発明家でもあって、中国農業の建立は『山海経』中になりに正確に記録されている。中国特有の蚕桑絹文化の起源と発展の記録は、『山海経』中に詳しく書かれており、蜀(蚕)の異称と蚕叢氏は四川が中国の蚕糸の起源基地の一つであることを表わしている。冷兵器——弓矢の改良と創制は弓(窮)氏と般族の本領で、羿(夏)時代の君主)は矢尻を改良して射程を伸ばした。剣戈の武器——銅鉄業の発展は昆吾(山の名)氏によるもので、君子国——虎トテム創始の功があり、大量に戦争の刀を用い、矛などは正に黄帝族蚩尤族が製造したものである。車、車輪と轆(轅)の創制は中輪国であり、黄帝族の本領である。独輪車——中輪の国、風帆車——飛車国等は均しく陸地人民の創造である。流砂はすでに砂漠化した地区があったのであろうか? 造船は鳥族番禺(地名)のものであり、熊族——禺京族はまた捕鯨の名手であり、彼等は陸橋(陸地間の連結)を越えてベーリング海峡を越えることが出来たのであろうか? 炎帝族、祝融族は火種を保存する氏族である。外婚制、走婚制、食物聘礼制は西王母族の伝統であり、彼女らはまた女系権力維持族であって、ほとんど四千年を経て原型を保持し、彼女らはまた中国の古い戦陣術の「創始

者」でもあった。日の出、日の入りの山十二座の位置を定めたのは少昊トテム族であった。月象の観察は月母羲和族の特技であった。天象と季節の關係の観測は、すべてのちの顛(顛)項(古代の帝王の名)曆法の先駆であらう。鼓、壎(土笛)、琴、瑟(おごと)、胡(二胡)、鐘、楽曲——楽風、歌、舞等々はあるトテム族の創造であり、それらはすべて『山海経』に遡源資料がある。皮革、馬靴、高蹠(足長)、頭套(一目)、手鉤(長臂(手長))等は、あるトテム族と関連があると記載がある。父子あるいは母娘の同名制(姓を同じくする制度)——不死の国、不死の樹——晚熟蟠桃、不死の草——冬虫夏草は、状況は異なるが近似的な名である。開明——九首虎トテム族、天呉——八首虎トテム族、君子国——二虎トテム族、垂垂四虎トテム国はみな虎族で成っており、有虞氏——舜と東胡族では、彼等は歴史の遡源の關係を同じくし、彼等はまた西胡族西王母族と同一のトテム系統なのではないか? 疾病——瘡疾(おこり)、大脖子病——瘰癧(こぶ)等、藥物——動植物・鉱物等の記載がある。南方火山、立正無影(直立して影がない)、大暑——これらは南方熱帯地区である。寒荒の国——は北方極冷地区である。およそこれら種々の事物について、『山海経』にすべて納得できる記載

があり、これは『山海経』が中国古代科学技術文化の経典古籍であり、中国物質文明・工芸文明の担い手であることを説明するに十分である。

中国で家畜化した動物は八〇種近く、筆者は中国史書『山海経』を含むの研究を通じて、アジアは「家畜化動物の中心」であり、中国はその中の一つで、黒竜江—蒙古草原—黃河流域—長江流域—閩江流域—珠江流域のトーテム族は均しく貢献があり、その中で犬戎族、羌、姜羊族、竜トーテム族—太昊族、氐族、馬族、伏羲族、炎帝族等は犬、羊、馬、牛、豚、鶏等の家畜化に対して均しく特別な功勞があることを実証した。西洋の学者が提起する「栽培化の中心」は、粟を以て最初の作物としたが、筆者が『山海経』を研究したときに、中国大地には二本の栽培化植物の中心地帯があり、一本は西は崑崙山を起点として稷—山—沼沢—稷沢より真東の天水の八卦山—華山沼沢地帯に到り、これはおおよそ塔里木（タリム）河流域—黃河流域上流地区—渭河流域が中心地帯であり、栽培化した植物の始めは稷（きび）で、次いで黍・粟（禾（稲））があり、トーテム族の羊族、稷族、伏羲族らの貢献が比較的大きいことが実証された。二本目の栽培化植物の中心地帯は岷江を起点とする長江中下流流域を中心と

する一帯で、栽培化植物は稻・菽（大豆）が主で、竜トーテム族、鳥トーテム族らの貢献が比較的大きい。これら二本の栽培植物化地帯には一本につながるように交わる処があり、これがすなわち広都の野—武都（甘肅）平原であり、これは『山海経』中に簡潔な記載があるので、このことから見て、『山海経』は中国動植物の家産化の中心と動植物の系統区分学の記録書である。

『山海経』は中国大地の莽浮（草深く浮いている）の林、鄧林などを列挙しているが、この種の原始的で大規模な森林は現在ほとんど遺されておらず、人為的な荒廢林の現象が進んでいて、古今の史実と比較することによって人々に警戒を与えるべきである。『山海経』が記録する大型動物で、猩猩（一種に留まらなご）、麟—麒麟（Alcelaphus）、玃、狻（アルマジロ）、斑馬（しまうま）、マレー鰐、灣鰐は、現在既に中国大地では消滅している。大熊猫（パンダ）、アジア象、中華（揚子江）鰐、猿などは絶滅危惧種となっていて、これらはみな絶対多数が人為的捕殺と環境変化の災厄に見舞われていて、正に非常に深刻な教訓になっている。流砂の出現、沼沢地—西海—ツアイダム盆地と黠沢—ロプノールの消失は人びとが明記する価値がある。歴史を以って鑑となし、中国

の環境保護、生態バランスの研究等に対して、『山海経』は正に不可欠な参考文献である。

『山海経』が列挙する中国トータム族生態生活区は、山—水—動植物—トータム族を以つて基本生態生活区単位とする原始生態社会の模式であり、山—水—動植物—家畜—トータム族の牧畜生活区の進歩模式に発展し、また山—水—生物—家畜—作物—トータム族の牧畜農業生態生活区を経過して、再び一歩発展して山—水—生物—家畜—作物—工（工具と器物、工芸制作）—商（定期市と物資交換）—トータム族の牧農工商生態生活区に到るのであり、『山海経』中には四七〇以上の山水トータム族生活地区の基本の上に、上述の生態生活区を並べることが出来、社会の発展状況を明確にしている。

『山海経』原書は一八章に編成され、本書は合わせて九章を成す。即ち南山経、西山経、北山経、東山経、中山経は各一章を成し、第六章は海外経で原海外南経、海外西経、海外北経、海外東経を包括する。第七章は海内経で、原海内南経、海内西経、海内北経、海内東経を包括する。第八章は大荒経で、原大荒東経、大荒南経、大荒西経、大荒北経を包括する。第九章は海内外経で、原海内経を包括し、一経中の条目ごとに番号を立て、号から索引できるようにしている。

本書は、まさに『山海経』の正文と『山海経図』、『山海経図贊』をまとめて、『山海経』の全貌を理解に便ならしめている。読み方は『漢語大字典』『辭海』『辭源』の読み方を採用している。途中に陶潜（淵明）の『山海経十三首』の詩を注に引き、時には自作の詩や韻文の注に加え、『山海経』の事物の認識に対して深みを加えた。

現に多方面の考証を経て、中国古典書『山海経』は中国トータム崇拜の専門書、中国博物学の分類書、中国古代民族活動の変遷と分布の分類書、中国生物、医薬と鉱物資源の全書、中国人文地理の専門書であり、実に中国科学技術文化の典籍であることを実証した。筆者は二〇世紀八〇年代より初説を開始し、九〇年代にはある程度文章を書き、一九九五年以降は全力を傾注し、日々「輸入（入力）」し、今日まで既に一〇年以上、歲月は流れる如く、わが人生は数えて七十八になった。思いがけず晋代の学者で同姓の郭璞景純（字名）が三—四世紀に先ず伝注をしており、一六〇〇年後に同姓の郭根生（字名、著者自身）が後に注証をしているのは、誠にすばらしいことである。唯その中には少なからず解釈が出来なかった事物があり、顛頊（てんきょく）（伝承の古代部族首領名）の如く死して即ちまた生くる等、未だ遺憾を免れ得ない。筆者の過分

の望みであるが、再び一六〇〇年が過ぎて紀元三六〇〇年になつたとき、誰か同姓人がまた作解するならば、本書が求めた『山海経』の流伝（伝播）が更に久遠になることが出来よう。「難を求めて易しく解き、孜孜として倦まず」は、これ即ち老年学者人生の一樂事である。これを以て序となす。

紀元二〇〇〇年三月一日北京中美村にて記す

付記

本稿をまとめるに当たっては、枋尾武教授の懇切なご指導をいただきました。厚く感謝いたします。

なお、注は筆者の「解題」において、多く付し、郭郭氏の「自序」中では、(9)のみに過ぎない。本来、郭郭氏の「自序」中にこそ、多くの注釈が必要と思われるが、それはむしろ『山海経』そのものの研究に入ることでもあるので、紙数の制約もあり、すべて省略した。後考を待ちたい。

〔注〕

(1) 『日本国見在書目録』は、日本に渡来していた漢籍の勅撰の目録。一卷。寛平三年（八九一）ころの成立とされる。この中に『山海経』が挙げられており、その多くは東晋の郭璞

(二七六・三三四)注のものと思われる。

(2) 『枕草紙』の「手長、足長」は、『山海経』の「海外南経」に「長臂国」、また「海外西経」に「長股国」が記述があり、その図もあるので、それを基にした絵が清凉殿の障子に描かれていたものであろう。

(3) 『続日本紀』の和銅六年（七一三）に、「五月甲子、畿内七道諸国郡郷名、着二好字。其郡内所生、銀銅彩色草木禽獸魚虫等物、具録二色目、及土地沃墾、山川原野名号所由、又古老相伝旧聞異事、載二史籍言上」とあるのが、諸国行政地名の表記の改正と風土記の撰進を命じたものとされる。

(4) 『尚書』は、中国古代王朝の最古の記録書であり、「禹貢」はその一部で中国の河川の状況を記している。『尚書』の編集には、孔子が関わっているので、「怪・力・乱・神を語らず」（『論語』）とする孔子の儒教的信条によって、不合理に思われることは削除・改定されていることがあるので、小川氏は後代の目から見て合理的過ぎるものは反つて信用できないとしたものである。

(5) トーテムとは、「未開社会である集団と特別な関係を持つと信じられている特定の動植物の種や自然物・無生物」（『大辞林』）で、しばしば信仰や崇拜につながる。北米インディアンの風俗から知られたものだが、古代中国にも見られることが明らかになった。

(6) 太皞伏羲（庖犧とも記す）氏を蛇身人首とし、炎帝神農氏を人身牛首とする伝説は、『史記』『三皇本紀』に見られる。ただし、『三皇本紀』は『史記』の著者である司馬遷のものではなく、唐の司馬貞の補撰になるもので、司馬貞は晋の皇甫謐の『帝王世紀』などを引用して作成したものである。

(7) 炎帝の出自に関することも、同じく『三皇本紀』に見える

ものであるが、炎帝の母である有蟠（有嬌とも記す）氏の女である女登が「神龍を感じて炎帝を生む」としたことを、小川氏はトーテム信仰に関係付けて取り上げたのであろう。

(8) 玄鳥（燕）の卵を飲んで妊娠し、子を生む二つの説話も、それぞれ『史記』『殷本紀』および『秦本紀』にあるもので、鳥もまた重要なトーテムの一つである。

(9) 郭郭氏は、E・ジェンクスの原著『The State and the Nation』の翻訳書である中国学者嚴復氏の『社会通詮』からの引用として、「蚕夷の区別は属性でもなく、トーテムである。虫・魚・鳥・獸百物の形を建（つく）り、襪（ふだ）を掲げ、徽幟（旗じるし）とした」と述べているが、ジェンクスの原著には、そのような表現は直接には見当たらない。ジェンクスはむしろオーストラリアの例を引いて、「原始人は近親結婚を避けるために、共同体を小さい単位にグループ分けし、それぞれが親しみのある対象をトーテムとして識別する」と言っていることに注意したい。小川琢治氏の論旨に近い。

（たけべ・けんいち 大学院聴講生、旧制成城高校理甲一八回、昭和二十年卒業）